

[資料]

障害児(者)の社会的支援に関する研究 —— 青年期における予後調査から ——

武藤安子¹⁾・瑞穂 優¹⁾・津曲裕次²⁾

本研究は、障害児(者)の社会的支援に関し、ソーシャルコンパニオンシップに焦点をあてて、そのニーズの実態と構造を明らかにすることを主な目的としている。調査研究Ⅰでは、青年期の障害児(者)およびその家族に認知される支援源の収集を行った。その結果、青年期にある障害児(者)の多くが「交友関係」は家族中心のみと認知されている実態が明らかになった。調査研究Ⅱでは、社会的支援のニーズの構造を把握するために、自由記述から得られたデータをKJ法によって分類し、数量化Ⅲ類を行った。また、得られたサンプルスコアをもとにコンパニオンシップニーズを低群と高群に分け、この2群を規定する要因を分析するために数量化Ⅱ類を試みた。その結果、青年期の在学中の若者に、限られた個人的資源、社会的資源の中で求めている社会的相互交流のニーズの高さがうかがわれた。

キー・ワード：障害児(者) 社会的支援 コンパニオンシップ 数量化

Ⅰ. はじめに

近年、コミュニティ心理学など心理学、社会学の領域において関心がもたれるようになってきた社会的支援(social support)に関する組織的研究の背景には、人生において遭遇する様々な危機的状况において、life stressの緩和をはかる社会的資源への重要性の認識、非専門家の役割の重視、予防的活動への志向性などが考えられることが指摘されている(嶋, 1991⁹⁾。

社会的支援の概念規定は多様であるが、現在では、House(1981¹⁰⁾による次のような定義が一般的である。①情緒的支援(emotional support) ②評価的支援(appraisal support) ③情報的支援(information support) ④道具的支援(instrumental support)。彼は、これらについて、支援源(フォーマルとインフォーマル)、状況(一般的問題と個別的問題)、認知傾向(客観的と主観的)の次元で考慮することを提案している。

社会的支援に関するこれまでの研究の多くは、直接的援助を意図した行為、問題焦点化された心身両面への援助に重点がおかれていたが、Rook(1987¹¹⁾)は、社会的関係においては、そのような行為ばかりでなく、たとえば、レジャーや一般的な交流において成立するような、相互的作用(social interaction)の本質的な満足感を共有する、ソーシャルコンパニオンシップ

(social companionship)と呼ばれる機能の意義を強調している。彼の研究では、ソーシャルコンパニオンシップについて、社会的コネクションが単に存在するというのではなく、また他から向けられる援助や安全の利益からひきだされる「受け手」の満足感という側面だけでなく、快適で親密な相互交流の機会の「与え手」として双方に求められる能動的側面に着目し、危機的状况への対応やより快適な日常生活のために、それは先行研究で知られているよりはるかに重要かつ変化に富む役割を果たしているということが示唆されている。なお、Rookは、研究上、ソーシャルコンパニオンシップをソーシャルサポートと相対する概念として扱っているが、現在では、両者を含めて広義に社会的支援の概念を展開させていく傾向にある(嶋, 1991⁹⁾。

リハビリテーションの分野においても、社会的支援に関し、これまで積み重ねられてきた現実的方策と上記のような隣接領域における研究知見などを統合的に発展させて、この領域独自の心理社会的な理論基盤の構成が課題であると考えられる。そのためには、まず当面の支援主体者である障害児(者)が、これまでどのような社会的支援のネットワークをもちながら生活してきたか、またどのような支援が必要とされているかを動的に把握していく必要がある。つまり、支援源の分布(フォーマルかインフォーマルか)、支援内容の構造(ソーシャルコンパニオンシップをも含む)、客観的支援体制と主観的認知の関係などに関し、時系列や

1) 横浜国立大学

2) 筑波大学心身障害学系

Table 1 調査対象に関する基礎的事項

調査対象（児・者）の人数および年齢	全体	74	平均	21.4歳（SD 4.0	年齢範囲	14.2～30.6歳
	男	35	平均	22.0歳（SD 4.2	年齢範囲	14.8～30.6歳
	女	39	平均	20.8歳（SD 3.9	年齢範囲	14.2～27.6歳
調査対象（児・者）の現在の生活状況	在宅一在学					22 (30)
	在宅一就業・通所					44 (60)
	施設入所					8 (11)
調査対象（児・者）の障害状況	肢体不自由					66 (89)
	その他					8 (11)
記入者	父					8 (11)
	母					64 (86)
	本人					2 (0.3)
記入者の居住地域	東京都23区内					45 (61)
	東京都下					8 (11)
	埼玉県					21 (28)

・年齢以外の数字は人数（％）

・障害状況は幼児期の医学的診断による

・施設入所は1名を除き、高校卒業後入所

地域的な変動に即した調査、研究の積み重ねが必要である。

本研究は、東京都内の一療育機関の利用者の予後調査を実施している過程において、障害児（者）の社会的支援の上記課題に関し、興味深い結果が得られたので報告をするものである。今回は、特に、客観的な状況把握ではなく、主観的な認知傾向を把握し、さらに、前述したソーシャルコンパニオンシップを含む広義の社会的支援に対するニーズを明らかにすることを主な目的としている。本研究は、次の2つの調査研究を含む。1) 青年期の障害児（者）およびその家族に認知される支援源の収集。2) 同対象者における社会的支援のニーズの構造を把握するために、自由記述から得られたデータを数量化により検討する。

なお、自由記述の数量化の手続きに関しては、方法的な課題も多いと考えられる（川間ら、1993⁹⁾）が、本研究では、事例（萩原ら、1989²⁾）も含め、実際に即した表現をもとに、動的構造把握に寄与し得る実践研究の方法かどうかを試みに検討していきたい。

II. 調査研究 I

1. 調査目的

青年期の障害児（者）およびその家族に認知される支援源の収集を目的とする。なお、支援源については、①個人的レベル（個人の有する生活行動力。以下個人的資源と呼ぶ）、および②社会的レベル（社会的な支援活動。以下社会的資源と呼ぶ）に分けてとらえる。な

お、家族は、支援へのニーズが障害児（者）本人と同一化している場合、支援源の媒介者としての役割あるいは支援源それ自体とその機能が分化しがたく、今回はどちらにも含めない。

2. 調査方法

1) 調査対象：1967年～1980年に東京都内Sセンター通園部に入園した266名（男140名、女126名）のうち、調査時の住所が判明に至らなかった105名を除いた161名。回収率は54.7%であった。調査研究Iの対象は、このうち記入に不備のあったものを除いた74名（男35名、女39名）である。

2) 調査期日：1992年6月

3) 調査内容および調査方法：対象者に直接、質問用紙を郵送し、記入後返却してもらった。回答は記名式である。調査内容は、①主観的に認知される個人的資源として障害児（者）の現在の生活行動力について「外出」「日常生活動作」「交友関係」の各々3種類のうちどれかを選択してもらった。②社会的資源として、これまでに参加したり行ってきた家族単位以外の活動について、その時の年齢、内容、主催機関など出来るだけ具体的に記入をしてもらった。

3. 結果と考察

1) 調査対象：調査対象の基礎的事項はTable 1に示した。

2) 個人的資源：青年や成人の個人的資源としての生活能力を、障害のレベルやその人の固有の能力別に還元して記述されるのは適切ではない（武藤、1993⁷⁾）。

障害児（者）の社会的支援に関する研究

Table 2 社会的資源の利用状況

種 類		在 学 中	卒 後	利用人数		
自主的活動		屋 内 屋 外	新聞発行、 ボランティアとの交友 etc.	自主グループ運営、 ボランティアと旅行、 友人とグループ旅行 etc.	12	
コミュニティ プログラム	公的機 関 体	屋 内	青年学級、クリスマス会 将棋大会、音楽会 etc.	クリスマス会、音楽会、 料理	8	34
		屋 外	キャンプ、ハイキング、 プール、運動会、旅行、 子ども会活動 etc.	キャンプ、ハイキング、 バーベキュー、社会見学、 福祉まつり、花火大会、 旅行 etc.	26	
	親の会主体	屋 内	青年学級、クリスマス会	子ども会	3	34
		屋 外	キャンプ、運動会、旅行、 スキー、子ども会 etc.	キャンプ、旅行、交流会、 雪あそび、プール etc.	31	
所属機関（学校・施設）内 プログラム		屋 内	おやつ作り、 交流会(他校)、民族舞踊 etc.	コンサート、バザー etc.	10	
		屋 外	修学旅行、キャンプ、 雪上キャンプ、宿泊訓練 林間学校、学校行事、 体験学習 etc.	旅行、キャンプ、研修、 宿泊訓練、海水浴、 ハイキング etc.	41 51	
社会教育プログラム		屋 内	クリスマス会、交流会、 おもちゃ図書館、 絵画教室 etc.	コンサート、 クリスマス会、スポーツ、 ショートステイ etc.	15	
		屋 外	キャンプ、旅行、 雪上キャンプ、 ボーイスカウト、 海外旅行・親善交流、 プール、合宿、運動会、 短期留学、サイクリング、 野外活動 etc.	キャンプ、旅行、 ボーイスカウト、 スポーツ、スキー etc.	81 96	

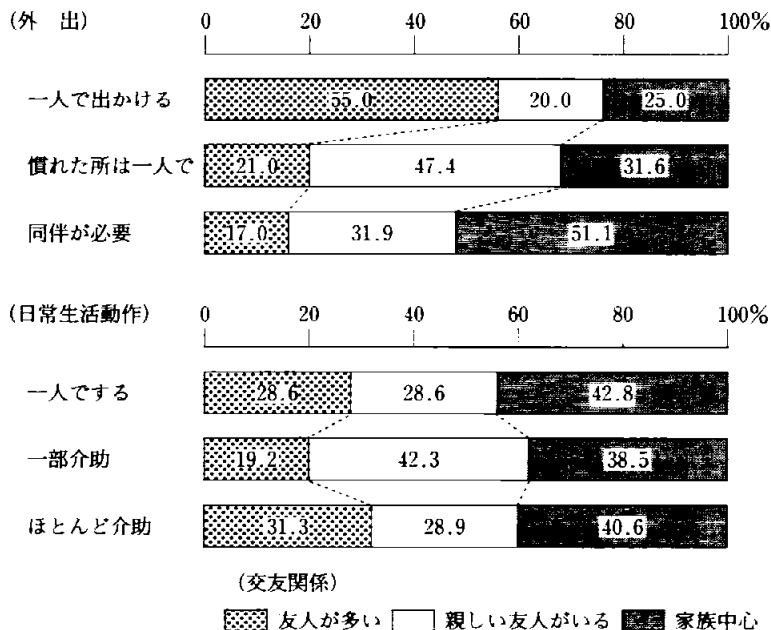


Fig. 1 「外出」および「日常生活動作」と「交友関係」とのクロス

Table 3 社会的支援のニーズに関するカテゴリーと数量化Ⅲ類の結果

KJ法によるカテゴリー	人数	数量化Ⅲ類のカテゴリー数量	
		I	II
1. 自立心が旺盛	29	-1.00719	0.38236
2. 友人との交流を楽しんでいる	25	-0.96357	-0.22901
3. 外出の機会が多くなる	22	-0.98571	0.51021
4. 健康面での心配	30	1.04483	-0.44824
5. 親子関係の距離が広がる	20	-0.80029	-0.66886
6. 卒業後の進路について迷っている	14	1.34423	1.70740
7. 自立に向けて親の支援と運動	18	0.84619	0.62976
8. 親が年をとった将来の不安	19	1.35010	-1.58446
9. 子どもの成長を喜んでいる	46	-0.59473	0.04277
10. 家庭内で役割がある	6	-0.23526	1.55489
11. 社会とのつながりがなく悩んでいる	8	1.65202	3.28155
12. 心が分かちあえる友人がほしい	8	0.21407	2.21784
13. 将来に役立つ実習に努めている	32	0.05793	-0.17045
14. 現在とはとりあえず気になることはない	15	-1.56733	-1.37799
15. 日常生活に対応する難しさを感じる	13	1.38417	0.31664
16. 適切な入所施設を探している（困っている）	10	1.28998	-1.30708
17. できれば結婚してほしい	5	-2.03909	0.99893
18. 自己主張が出来てうれしい	15	0.17608	0.55234
19. 地域のひとりとして生活していきたい	35	-0.41100	0.48538
20. 介助に苦労している	16	1.46864	-1.74559
21. 現在の施設に対して不満	4	2.56008	0.03390
22. 現在の施設が気に入っている	12	-0.60656	-1.46168
固有値		0.49519	0.30988
相関係数		0.70370	0.55667

したがって、生活行動力の多次元の把握に向けて、一例として「交友関係」と、「外出」「日常生活動作」のクロス集計の結果をFig. 1に示す。

青年期の障害児（者）にとって、多くの友人がいるか、親しい友人がいるか、家族中心の生活かという交友関係の状況は、日常の生活動作が自立しているかどうかということよりは、外出の機会に、一人で出かけられるかどうかにかかわりがある状況がうかがわれる。しかし、青年期にある障害児（者）の四分の一から半数にかけて「交友関係」は家族中心のみと認知されている実態が明らかになった。

3. 社会的資源：収集した社会的資源の利用状況を、支援源の領域の特性によるAnderson (1983¹¹) の分類を参考にしながら、「自主的活動」「コミュニティプログラム」「所属機関内プログラム」「社会教育プログラム」の4種に分類し、各々を屋内、屋外および在学中、卒業後に分けてTable 2に示した。同一の活動に何回も参加した場合や、ひとつの活動を長年継続してきた場合などもあるが、挙げられた項目を利用単位として利

用人数を集計した。家族、学校主催以外はなしとこたえた人から、20近くの項目を挙げた人まで個人の利用状況には多少がみられた。利用した支援源の種類としては、友人、職場の人などインフォーマルあるいは自然発生的な支援源や組織による交流体験を挙げた人は少なく、親の会など自助的組織も含め、より組織化されたフォーマルな支援源の参加体験が圧倒的に多く挙げられている。

いずれのプログラムにおいても、屋外の活動への参加の記述が多い。上述の個人的資源の項で得られた結果と関連して、小嶋(1993⁹)により報告された興味深い調査結果がある。「K市在住の精神遅滞児・者の家族の在宅福祉サービスを受ける意志」に関して、18項目のサービス内容を提示し、有料、無料に分けて問うたところ、「有料でもかまわない」として1項目突出してニーズの高かったものは、「作業所、施設の送迎」であった。つまり、支援源へのアクセスの問題が社会的交流への鍵の一つであることがうかがわれる。

年代による変化、地域差の検討は今後の課題である。

Table 4 数量化Ⅱ類による要因分析

項 目	カ テ ゴ リ ー	ウ ェ イ ト	偏 相 関
性 別	1：男	-0.310	0.223
	2：女	0.310	
年 齢	1：高校生（18歳）以下	0.928	0.412
	2：それ以上	-0.199	
個人的資源 （外出）	1：一人で出かける	-0.838	0.393
	2：慣れたところは一人で	0.333	
	3：同伴が必要	0.177	
現在の生活状況	1：在宅－学生	0.635	0.529
	2：在宅－社会人	0.029	
	3：入所	-1.063	
利用社会的資源	1：多い	-0.283	0.244
	2：少ない	0.283	
保護者の現住所	1：23区内	0.073	0.215
	2：東京都下	0.612	
	3：埼玉県	-0.323	

相関比 0.5714

Ⅲ. 調査研究Ⅱ

1. 調査目的：社会的支援のニーズの構造を把握するために、自由記述から得られたデータを数量化により検討する。

2. 調査方法

1) 調査対象、調査期日および調査方法：調査研究Ⅰに同じ。

2) 調査内容：「この頃、お子さんのことについて感じたり考えていることを聞かせていただけますか」という問に自由に記述をしてもらい、これを社会的支援のニーズとした。なお、調査者と調査対象者の間には、以前に、専門的指導関係が成立していたという基盤があるためか、子細な記述が多く得られた。

3) 自由記述のカテゴリ化および数量化：上述の自由記述で収集された550項目について、大学教育および大学院生他1名でKJ法（川喜田，1967⁴⁾）を参考にして分類を行い、22カテゴリーに分けた（Table 3を参照）。さらに、各対象者の自由記述を上記手続きで得られたカテゴリーのどれに該当するかを調べ（自由記述の名義尺度化）、林の数量化Ⅲ類（田中ら，1984¹⁰⁾）を適用した。

3. 結果と考察

1) 調査対象：調査対象の基礎的事項はTable 1に同じ。

2) 自由記述による社会的支援のニーズの構造

KJ法によって分類したカテゴリー毎に対応した記

述を行っている場合、数値1、記述のない場合0を与え、自由記述による22カテゴリーを説明変数として数量化Ⅲ類による分析が試みられ、解釈可能な第Ⅱ軸までを採用した。Table 3に軸ごとのカテゴリー数量および固有値、相関係数を示す。

第Ⅰ軸では、正では21、11、20、15、8、といった不安を表すカテゴリーの絶対値の値が高く、負では17、14、1、3、2、といった満足、期待を表すカテゴリーの絶対値の値が高い。第Ⅰ軸は、現在の状況に対する認知の安定性があるかどうかを表していると言えよう。従って、この軸は「認知の不安定性－安定性」の軸と考えられる。第Ⅱ軸では、11、12、6、10、17、といった社会的交流を求めるカテゴリーの絶対値の値が高く、負では、20、8、22、14、16といった実際の支援のニーズを表すカテゴリーの絶対値の値が高い。従って、この軸は前述のRookが示唆した社会的支援の機能に対するニーズの違いを表していると解釈され、「コンパニオンシップニーズ－手段的ニーズ」の軸と考えられる。

3) 社会的支援のニーズを規定する要因

前述で得られた自由記述の構造から、第Ⅰ軸、第Ⅱ軸のサンプルスコアが両方とも中央値よりも低いまたは高い17人を取りだし、「低コンパニオンシップニーズ群（以下低ニーズ群と略す）」と「高コンパニオンシップニーズ群（高ニーズ群）」に分け、この2群を規定する要因を分析するために数量化Ⅱ類を試みた。説明変

数として、「性別」「年齢」「現在の生活状況」「保護者の現住所」そして調査研究Ⅰから得られた「個人的資源（外出）」「利用した社会的資源」の6項目を用い分析した。その結果をTable 4に示す。

偏相関係数の高い項目ほど2群の判別に大きく寄与していることを意味している。また「低ニーズ群」のサンプルスコアの平均値は-0.756、「高ニーズ群」のサンプルスコアの平均値は0.756であるから、正のウェイトの大きいカテゴリーは「高ニーズ群」の特徴を、負のウェイトの大きいカテゴリーは「低ニーズ群」の特徴を示していることになる。Table 4より、「高ニーズ群」の特徴を見ると、性別は「女性」、年齢は「18歳以下」、外出は「慣れたところは一人で」、生活状況は「在宅の学生」であり、利用した社会的資源が「少ない」、保護者が「東京都内」に在住ということになる。これらの結果から、青年期の在学中の若者の、限られた個人的資源、社会的資源の中で求めている社会的相互交流のニーズの高さをうかがうことができよう。

「低ニーズ群」の特徴は、より多面的な解釈を必要とする。施設入所者や18、19歳以上の青年にコンパニオンシップニーズが極めて低いのはなぜであろうか。施設入所者の保護者による「さしあたって気になることはない」「入所は本人の意志に反していたかもしれないが、今は元気なのが何よりの幸せ」という記述に複雑な経緯も読みとれる。個人的資源や利用社会資源の豊かなほどニーズが低いのは、果たして現状に十分に満足していることのあらわれであろうか。地域差は、コミュニティケアの量と質を示す指標となり得るのだろうか。より多角的かつ心理学的な視点を提供する実証的研究を継続させていくことが必要であろう。

IV. まとめと課題

青年期にある障害児（者）の予後調査の過程において、社会的支援に焦点をあて、その動的把握を目的として2つの調査研究を行った。調査研究Ⅰでは、支援資源の収集を行ったが、これら主観的な資料と客観的資料とを対応させ、時系的、空間的分析を行っていくことが課題である。調査研究Ⅱでは、社会的支援のニーズを知るために、自由記述をKJ法によって分類し、カテゴリー化を行った。さらに、数量化Ⅲ類および数量化Ⅱ類による解析を行い、社会的支援のニーズの動的構造把握を試みた。一応の結果を得たものの、この方法が文章記述の調査に関し、内容の分類や特性の抽出を可能にしたことを意味するかは明言しがたい。今後、社会的支援のニーズの内容的資料として概念化および

分析基準の設定の方向で生かされていくことが期待される。

社会的支援の実践の体系化に関しては、リハビリテーションの領域は他の臨床領域に比してむしろ先行していると言うべきであろう。今後は、たとえば、ソーシャルコンパニオンシップのような概念も含みつつ、独自の理論構築に向けてより精密な実証研究を行っていくことが課題であろう。

最後に、調査に対し人間関係的な絆を意識してご協力くださった方々に心からお礼を申し上げる。また、データの整理に参加をいただいたM.S.Wの山川照代氏、研究方法にアドバイスをいただいた東京理科大学短期大学の田中佑子氏に深く感謝する。

文 献

- 1) Anderson, K (1983): 治療的レクリエーションの原理と実際: 小島蓉子編 社会リハビリテーションの実践. 誠信書房.
- 2) 萩原 優他(1989): 学級を基盤とする児童生徒指導の研究—数量化Ⅲ類分析による教師のほめ・叱り形態の把握—. 川崎市総合教育センター研究紀要.
- 3) House, J.S. (1981): Work stress and social support. Reading, Mass: Addison-Wesley.
- 4) 川喜田二郎 (1967): 発想法 中公新書.
- 5) 川間健之介・佐藤正美・中司利一 (1993): 中途障害者の障害受容と友人関係—自由記述の数量化による検討—. 筑波大学リハビリテーション研究, 2 (1), 29-33.
- 6) 小嶋珠実 (1993): 精神遅滞者の家族にとっての「住民参加型在宅福祉サービス」. 社会福祉研究, 58, 85-91.
- 7) 武藤安子 (1993): 発達臨床. 建帛社.
- 8) Rook, K.S. (1987): Social support versus companionship: Effect on life stress, loneliness and evaluation by others. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 1132-1147.
- 9) 嶋 信宏(1990): ソーシャルサポート研究の現状と臨床場面への応用. 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 12, 63-72.
- 10) 田中 豊・垂水共之・脇本和昌 (1984): パソコン統計解析ハンドブックⅡ 多変量解析編. 共立出版.

Brief Note

**A Study of Social Support for Handicapped Children :
From Follow-up Study in Early Adolescence**

Yasuko MUTO, Yu MIZUHO, Yuji TSUMAGARI

In recent years, much interest has focused on contrasting specific functions of social relationships that contribute to social and psychological well-being. K.S.Rook (1987), for example, suggested in his study that the function of social support such as companionship played a more important and more varied role in life than previous studies had acknowledged. Two studies analyzed data from a follow-up survey of handicapped children and their families to investigate the needs for social support including social companionship.

Study 1 was carried out to collect supportive resources recognized by handicapped children in their adolescence and their families. The major findings were as follows; The fact that for most of handicapped children their associates were limited in only their families and a few was revealed. The individual use of supportive resources varied in amount. Concerning types of supportive resources they used, there were few who mentioned the experience of interpersonal exchange with others in the informal supportive resources or organizations, which were organized automatically, like friends or persons who worked in the same office, but many experience in the formal or organized supportive resources or organizations including self-helping organizations like parents's associations were mentioned.

Study 2 was carried out to investigate the structure of needs for social support. For this purpose, quantification theory were applied to descriptive data. 550 descriptions about handicapped children were categorized into 22 categories by KJ method. Quantification method of third type with 22 categories as explanatory variables obtained the structure of thoughts about handicapped children consisted of 2 components. 1st component was "security - anxiety", 2nd was "needs for companionship - needs for instrumental support". Two groups were made by sample scores of quantification method of third type. For high score group, more needs were necessary than for low score group. Quantification method of second type with 6 categories, such as "sex" or "age", as explanatory variables, and scores of quantification method of third type as criterion variables suggested that there were more needs of social support including social companionship for handicapped students in their adolescence, because of lack of individual and social resources, and there were less needs for the handicapped children who were in the institutions and who were more than 18 or 19 years old.

The application of quantification to descriptive data was useful, but must be discussed whether it was really able to classify the data and extract the speciality.

Key words : disabled children (person), social support, companionship, quantification theory